図書紹介（82）

『神話思考 II　地域と歴史』

松村一男著　言叢社、2014 年、7,407 円＋税

おやさと研究所教授
堀内　みどり　*Midori Horiuchi*

『神話学とは何か　もう一つの知の世界』（有斐閣新書、1987 年）、吉田敦彦氏との共著。松村一男氏の著作との最初の出会いだった。「科学偏重の社会に生きて、私たちは神話を未開の人々の、荒唐無稽な『虚偽の話』と考えてきた。しかし、神話は、宇宙はどうしてできたのか、人間はどこからやってきたのか、文化はどのように手に入れられたのか、これらの問いに、すばらしく、輝かしいイメージをくりひろげて答える人類の思索の結晶である。近代合理主義の枠を脱し、私たちを最も新しい『もう一つの知の世界』に誘う珠玉の入門書。」と銘打った内容説明通り、神話学に関心を寄せる人にとって格好の入門書であった。神話を担ってきたそれぞれの民族の世界観や考え方が学べるものともなっていた。また、レヴィ＝ストロースやユングによる神話分析の方法が説明されていて、こうした神話分析が日本神話の解析に用いられた。そうして、培われてきた松村氏の研究は、いくつもの論文や発表となったが、『神話思考』にはそれらが分野ごとに収録されている。

松村氏は、本書冒頭で次のように述べる。

> 本書は 2010 年刊行の『神話思考 I ―自然と人間』の続編である。前著刊行にあたっては、私にとっての神話研究を次のように考えていた。すなわち、第 I 部「神話学の歴史と理論」、第 II 部「インド＝ヨーロッパ神話」、第 III 部「ギリシア・ローマ神話と聖書」、第 IV 部「現代文化神話」である。これまでの私の研究をこれら五つの分野に再構成して、研究成果を問うためには、その全体像を示す形で公表する必要があると考えていた。しかし所収予定の論文の分量が多くなりすぎ、前著では、第 I 部から第 III 部のみを収録し、続巻において第 IV 部、第 V 部の収録を目指すことにした。今回『神話思考 II』の刊行にあたって、それを第 I 部「日本神話」、第 II 部「日本宗教」、第 III 部「文化としての神話」とし、その他を第 IV 部「『神話思考 I』以降」とした。

この第 I 部、第 II 部には、松村氏が天理大学に在籍した時代の研究が成果となってあらわれている。なかでも第 II 部「10『こふき』の基層観念・泥海」、「11 天理教文書『こふき』にみる教祖中山みきの女性性」、「12 三つの世界観―『こふき』・ギリシア・アメリカ」は、天理教の「こふき」が題材となっている。

「『こふき』の基層観念・泥海」の中で、松村氏は、「こふき」を信者に示す世界の構造の起源を語る「コズモゴニー（世界創造神話）」であって、以下のような直観的・啓示的議論の進め方が根底において働いていると指摘している。

世界の始まりは現在とは異なる状態で、すべてが未完成。
この世は善。自然は神。世界は神の身体である。
より下等な生物から進化して人間は生まれた。
しかし人間に先行する生物も世界の一部、すなわち神の一部。
神の多様な現れは、人間より先に存在しなければならない。
しかし月日一神の教えとその他の神あるいは神的存在は、矛盾を生じる危険がある。
親神が他の生物を雛型、道具として、人間創造のために自らその体内に入ったり、食したりすることによって、人間に先行する動物に神性を分与し、神の一部として人間を創造したと考えることで、前項の矛盾が解消される。（295 頁参照）

そうして、創造原初の状態として記された「泥海」の水平的な世界への論考が始まる。また「天理教文書『こふき』にみる教祖中山みきの女性性」では、「こふき」は教祖中山みきの経験の反映という視点から考察され、「男性的・支配的・『から』的な漢文調の文章ではない、女性的・平等的・『にほん』的な語り言葉の世界にこそ、天理教の本質がよく現れていると思われる」（337 頁）と結んでいる。

本書を通して神話学が切り開いてくれる世界を体験されること、また、本書の前著も合わせて読まれることをお勧めしたい。本書に収められている論考は以下の通り。

I　日本神話
1 ワニとは何か―日本神話の動物性／2 日本神話における鳥と聖空間／3 鳥の家畜化―鷹と鵜／4 環太平洋地域における太陽の消失と再出現の神話／5 日本神話における火と水

II　日本宗教
1 大国主伝説と出雲神話／縄文から見る―ネリー・ナウマンの日本宗教・神話研究／3 蛇の神話学―三輪・出雲・諏訪／4 神功・応神伝説に秘められたもの―神功皇后は卑弥呼か／5 雄略天皇と暴君伝承／6 世界の神話からみた猿田彦／7 海幸・山幸―バナナとワニに出会い、別れる／8 古代日本と宗教／9 江戸時代の災害の語り／10「こふき」の基層観念・泥海／11 天理教文書「こふき」にみる教祖中山みきの女性性／12 三つの世界観―「こふき」・ギリシア・アメリカ／13 アイルランドと日本の物語―日本の鬼とアイルランドの妖精

III　文化としての神話
1 アメリカ合衆国における神話とイメージ／2 ワシントン DC という聖地／3 テイルズ・オヴ・ザ・パワー―アメリカの悪魔崇拝宗教／4 女神になった「ダイアナ」妃／5 ジェンダーと神話／6 現代メディアにおける「神話」／7 宇宙のロマンス―星空の現代神話／8 動物への愛の二元論神話／9 愛の解剖学／10 非宗教的表現と宗教―フリードリヒの風景画／11 日月旅行記の系譜／12 鳥人神話／13 異界の神話学―海の異界を中心に／14 神話学から見たシンドバードの航海／15 世界各地の狐伝承／16 比較神話と文化史―『オデュッセウス』、『ロビンソン・クルーソー』、『ユリシーズ』／17 星のシンボリズム

IV　『神話思考 I』以降
1 印欧語族の死後世界観／2 古代アイルランドの南北問題―牛と鹿の伝説　付・『フィンの少年時代』解題／3 古代ギリシアの霊魂観／4 アナーヒター女神の東西／5 妖怪・妖精・怪物・神獣―海の怪異・海の王／6 罪と罰という神話体系―オリエントと旧約聖書／7 世界の諸神話における生と死